JSPCCS-JCC Joint Session

JSPCCS-JCC Joint Session
成人期の川崎病ー動脈瘤と石灰化病変への対策ー

座長:
濱岡 建城 (京都府立医科大学)
中村 正人 (東邦大学医療センター大橋病院)
Fri. Jul 17, 2015 4:40 PM - 6:10 PM 第3会場 (1F ペガサス C)
JJS-01～JJS-04
所属正式名称：濱岡建城(京都府立医科大学大学院医学研究科　小児循環器・腎臓学)、中村正人(東邦大学医療センター大橋病院　循環器内科)

[JJS-02]川崎病冠動脈後遺症に対する冠動脈インターベンション

○横井 宏佳 (福岡山王病院　循環器センター)

川崎病患児に見られる冠動脈病変は急性期の巨大冠動脈瘤が特徴であるが、学童期には冠動脈瘤の前後に石灰化を伴う高度狭窄病変が出現する。狭窄病変に対して、従来のバルーンによるカテーテル治療は石灰化病変のため拡張困難で、バイパス手術は長期の開存性の問題があり、薬物療法下に運動制限を行ってきた。ロータブレーターは川崎病患児のバルーン拡張不能病変に対するカテーテル治療を安全に施行可能とし、その効果は遠隔期も維持され、患児の学童期発達育成にも良好な効果をもたらした。ガイドワイアーが通過する病変であれば、川崎病冠動脈病変に対しては、外科治療ではなく、より低侵襲であるカテーテル治療が第一選択になると思われる。
また、若年発症急性冠症候群（40歳未満）の院内予後予測因子に川崎病様冠動脈瘤の存在が明らかとなり、冠動脈瘤を有する川崎病患児の小児期から成人期における疾病管理の重要性が示唆され、今後、小児循環器医と成人循環器医の緊密な連携が求められる。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery